1968年5月ー消えない言葉

西　川　長　夫

まえがき

1998年は「5月革命」30周年の年である。10年前の1988年，つまり「5月革命」20周年の年にはフランスでは30冊ほどの5月革命論が出版されたということであるが，30周年の1998年はどうであろうか。1988年と同様，フランスではかなりの量の5月革命論が出版されて，日本のジャーナリズムはほとんどそれについて無関心にすごすであろう，ということが予想される。1988年にはわが国では少なくとも雑誌『思想』(11月号）が「思想空間の変容　1968－1988」という，それだけ読めば一見5月革命論とはわからぬようなタイトルで特集を組んでいる。1998年の場合も，『朝日新聞』が「'68/'98の視線，地球市民はいま」という見出しの，なかなか興味深い連載記事を年末からのせているが，その記事から1968の5月革命について改めて考えてみようとする人は，おそらく少ないだろう。1968年はいまの学生や若者たちが生まれる以前の事件なのだから。

1967年10月から69年の10月までの二年間私は留学生としてパリに滞在し，ソルボンヌ（パリ第四大学）とオートゼチュード（高等研究院）に通っていたので，いわゆる「5月革命」の発端から終焉までを，そのただ中にいて見とどけることになった。5－6月事件のあいだほどフランスの学生と若者に共鳴し一体感を味わったことはないだろう。いま思うと，それは私にとって，フランスの歴史や文学に対する見方を根底から変えただけでなく，私の生き方を根底からくつがえすような決定的な事件であった。私は毎日ソルボンヌ大学やオデオン座に出かけては，可能な限りあらゆる集会やデモに参加し，好奇心の塊となって人々の発言に耳をかたむけ，ビラや壁の言葉を集めて，「パリ・5月の記録」(『展望』1968年8月号）と題するレポートを書いたりした。その後もこの歴史的な事件は私の関心事の中心にある。だが，正直言って，私はいまだに「5月革命」を十分に理解できたとは思わない。さまざまな5月革命論を読んでみても，いまだに心から納得できるような解釈に出会わないのである。本当に納

得できたら自分でも５月革命論を書きたいと思い，手に入る限りの資料も集めているのだが，その時期はまだ当分来そうにもない。

事件を正しく判断するために，ある程度の距離が必要であることはたしかであろう。だがその距離なるものも，実はその時代のイデオロギー的な制約をうけてしまう。事件の直後には，期待が大きかったこともあって，「革命」に直接かかわった学生や大学人のあいだには，失望や挫折感の表明が目立っており，むしろ否定的な解釈が多かったのではないかと思う。「20年後」に出版されたブルデューの『ホモ・アカデミクス』は，そうしたシニスムとルサンチマンを「大学機構の社会学」という「学問」に昇華させたという印象が強い。[1]

だが20年後の1988年に最も際立っていたものは，５月革命のなかに新しい個人主義の発生やポスト・モダンの思想との関連を見出そうとする傾向であった。デリダ，ドゥールーズ，ガタリといった脱構築派やポスト・モダンの思想家たちの活躍は別としても，いわゆる68年世代（Soixante-huitard）と呼ばれる人たちの存在が注目をひきはじめていたからである。30年後の1998年には，また新しい角度から「５月革命」が論じられるだろう。

さまざまな解釈のなかで，30年後のいま新たな説得力をもってきている解釈の一つは，「５月革命」を世界システム論の観点から考察する見方である。世界システム論的な見方に説得力を与えているのは，何よりも1989年とそれに続く世界史的な諸事件と世界の現状である。この見方によれば1968年５月は，世界システムと国家間システムの根底的な変容の予告であり，その始まりであった。[2] 68年の「学生反乱」の世界同時性が，ここでは大きな意味をもってくる。

イマニュエル・ウォーラースティンは，本年（97年）の９月，立命館大学国際関係学部の創立10周年記念シンポジウムに招かれたさいにそのことに触れ，さらに「1968年の世界革命」が社会科学の古典的な二つの領域 ― 法則定立的科学（経済学，政治学，社会学）と個性記述的科学（歴史学，人類学，東洋学） ― からはみだす学問として，女性学，エスニック研究，環境学・科学の社会学といった領域を生みだし，そのことが1970年代の社会科学における混乱と，さらには複雑系研究とカルチュラル・スタディーズという既成の社会科学を超えた最新の学問領域の形成に結びついていることを指摘している。[3] もっともウォーラーティンは，すでに10年前（つまり1988年）に，1968年を世界システムにおける革命として明確にとらえる論考を発表していた。その論考は６つの命題と６つの設問，およびそれにかんする解説からなるが，ここではその命題の部分のみを引用しておこう。

命題1　1968年は世界システムの内容と本質に関わる革命であった。

命題2　1968年の異議申し立ては，世界システムにおけるアメリカの覇権 ― 及びその覇権を黙認したソ連 ― に反対するものであった。

命題3　1968年の抵抗運動の中で，派生的ながらやがて激しさを増していったのは「既成左翼」に反対する反システム運動であった。

命題4　1968年の反文化運動（カウンター・カルチャー）は，革命の陶酔の一部であったけれども，政治的には1968年の中心部にならなかった。

命題5　「少数者集団」や被支配階層の代弁者としての革命運動は，「多数者集団」の代弁者に擬せられた革命運動に対して，もはや従属的な地位に甘んじる必要はなく，また甘んじてもいない。

命題6　社会改革の基本戦略に関する論争は，反システム諸運動間で再開され，今後20年の政治論争で主流を占めるであろう。

（「1968年－世界システムにおける革命」，丸山勝訳『ポスト・アメリカ』114～143頁）

説明の文章を省略して，このような命題ばかりを取り出して並べると，1968年革命が，ウォーラースティンの世界システム論と反システム運動の図式の中に無理矢理に押しこめられたという印象が避けがたいが，その2年後に記された次の文章は，もう少し68年革命自体の内的説明になっていてより説得的である。

「1968年革命は，あらゆる表現方法による自由主義的真理への挑戦である。何にもまして，国家は自覚的な集団意識の妥当な調停者であるという信条への挑戦である。1968年の革命勢力の挑戦相手は，国家機構そのものを握る権力者たちだけでなく，国家の「イデオロギー装置」を握る権力者たちすべてであった。つまり，あらゆる古典的反システム運動が挑戦相手である。それらの運動が ― きわめて多くの場合 ― すでに権力の座にすわり，国家は自覚的な集団意思の妥当な調停者 ― あるいは体現者 ― であるという神話を利用していたことが，ほかならぬ挑戦の動機となった。国家を大勢の政治的「出演者」の一人という地位にまで引き下ろすことが，「新型」反システム運動の暗黙の目的であった。その信じ従うところによれば，「既成左翼」の歴史的戦略 ― すなわち国家権力の追求 ― は社会変革のために不可欠な戦略とは見なされず，それどころか多くの場合，全くの逆行例とされた。」（「はじめに－1980年代の教訓」同上書，35頁）

ウォーラースティンがここに書いていることは，68年5～6月のパリにおいても強

く感じられたことであり，— それは68年における「既成左翼」，とりわけ共産党とＣＧＴの孤立といらだちによく現れていた — また，反体制運動は国家権力の奪取をめざすことによって，国家に回収され，体制化するというウォーラーステインのテーゼを知る者にとっては理解しやすい。つまりウォーラーステインは，旧来の反体制運動とは異質の，体制化しない，国家や世界システムに回収されない，「新型」の反体制運動の誕生を68年革命のなかに見ているのである。この新しいタイプの反体制運動は，アルベルト・メルッチの言う「新しい社会運動」や「現在に生きる遊牧民（ノマド）」に呼応している。[4]

私はウォーラースティンのこのような解釈にほぼ全面的に賛成である。だがそれは68年５月の全体を覆う解釈になりえているだろうか。また68年５月の生命とも言うべき部分に触れているだろうか。やはり満たされないものが残る。国家権力が突然機能を停止して，台風の只中の無風の青空のように現出した奇妙な時間と空間。それまでよそよそしく顔をそむけあっていたさまざまな集団や階層や国籍の壁が突如崩壊して，街頭や広場や教室や劇場などにくりだす群集のあいだにひろがる共感，はてしない真面目なお喋りと笑い。あらゆる壁をうめつくした落書きとビラ。自分自身が内奥から変りはじめて，あらゆる可能性が目前に開けていくような快い感覚。……そうした生きられた時間の記憶とウォーラーステインの解釈とのあいだに，大きな開きがあることは否定できない。５月はいかなる意味において「祝祭」であり「文化革命」であったか，それはいかなる「新しい文化」を生みだしたのか，そもそも「文化革命」とは何であるかが改めて問われなければならないだろう。例えばあの壁に書かれた言葉の意味と感性である。

パヴェ（敷石）の下にある
それは砂浜……

このあまりにも有名になった一句が示しているのはシュルレアリスト的，フロイト的な感性であるかもしれない。だが敷石の下にひろがる白い砂浜は，バリケードを作るために敷石をはがしてみなければ発見できなかった。それを見出したときの喜びと感動を見落としてはならないと思う。

人が来る前には森があった
人のあとに砂漠が残る。

ゴムの乳首が社会を肉食にする。

これはエコロジスト的文明批判であるが，その批判を可能にし，その批判を支えている感性が重要だろう。

ポリ公はわれわれ各自の内部に眠っている　われわれの内なるポリ公を殺せ！

国家とはわれわれ一人一人のこと。

この数年，私が懸命に主張している国民国家論や国民化の問題は，すでにこうした一句に集約されてしまっていたのではないだろうか。いま読みかえしてみてそんな印象が強い。

以下の章に納めた5月革命の壁の言葉にかんする文章は，「1968年7月18日パリ」という日付が語っているように，5－6月事件の直後にパリで書かれている。この文章は日本に送られ『パリ・5月の記録』の続篇として『展望』に掲載されることになっていたが，68年8月，「プラハの春」で知られていたチェコスロバキアに対するソ連軍の軍事介入という大事件があって，編集方針が変り，結局掲載されなかった。今回，ほぼ30年前に書かれ，途中まで編集者の朱が入っている色あせた原稿を筐底から取りだして発表する決心をするまでには，かなりの躊躇があった。読みかえしてみて，この一人よがりな幼稚さとすでにジャーナリズムの通俗性を受けいれている浅薄さは，今では鼻もちならないが，しかしそういう青臭さや矛盾を含めて，そこに5月があったのかもしれない。一つの資料としてあえて提出することにした。[5] 30年の歳月はやはり長く，すでに記憶が鮮明でない部分や，間違って記憶している部分，いまでは説明できない記述があることにも気付いたが，現在の時点から合理化を図らず，明らかな誤記や間違い以外は，欠落や矛盾もそのまま残すことにした。

この前書きを終えるにあたって最後に一言つけ加えさせていただきたい。この文章を書きながら，私は5月革命についての納得のゆく説明は結局ありえないということに思い至った。革命的な新しさは何によって説明されるのだろうか。もしそれが既成の言語によって，例えば既成の社会科学の用語によって完全に説明し解釈できるものであれば，それはもはや新しくも革命的でもないだろう。5月革命の新しさと革命性は，後の世代によって発見され表現されたときにのみ存在するのではないかと思う。

注（1）ピエール・ブルデュー著，石崎晴己・東松秀雄訳『ホモ・アカデミクス』（藤原書店，1997年）［Pierre Bourdieu，*HOMO ACADEMICUS*，1984］，本書の第五章「危機的瞬間」は五月革命の分析に当てられている。

（2）日本における数少ない貴重な研究の一つとして，岡本宏編『1968年，時代転換の起点』（法律文化社，1995年）がある。

（3）Immanuel Wallerstein，*The Social Sciencies, and International Relations for the Twenty-first Century*, Symposium at Ritsumeikan University，Sept. 22.1997.

（4）アルベルト・メルッチ著，山之内靖他訳『現代に生きる遊牧民（ノマド）』岩波書店，1997年。

（5）「5月革命」における言葉の氾濫とその意味については，68年当時すでに多くの文章や書物が書かれているがとりわけミシェル・ド・セルトー著，佐藤和生訳『パロールの奪取』法政大学出版会，1998年〔Michel de Certeau，*La prise de parole. Pour une nouvelle culture*, 1968〕を参照されたい。この書物の初版は1968年8月に書かれいる］「壁の言葉」はその後 "Les murs ont la Paraoe" のタイトルの下に一冊の本にまとめられ，邦訳も出ている。— J．ブザンソン編，広田昌義訳，粟津潔構成『壁は語る』竹内書店，1969年。その他，文献は多いが，言うまでもなく，すべての壁の言葉が収められているわけではない。

壁の言葉

はじめに

5月の初めから6月にかけて，カルチェ・ラタンの壁という壁は，落書き，スローガン，詩，ビラ，ポスター等々でおおわれてしまった。この数年来パリはアンドレ・マルロー文化大臣の方針にしたがって，建物の洗浄が進んでいる。幾世紀のあいだに付着して建物を灰色に見せていた埃が洗いおとされたあとに，白い石の肌があらわれ，パリの街はおどろくほど明るくなった。建物の通りに面した大きな壁には，たいてい「1881年7月29日の法律により張紙を禁ず」という黒い文字がペンキで横に長く記されている。この白い壁を汚すことは，それだけで象徴的な意味があった。だが壁の落書きや張紙はそういう消極的な意味だけにとどまらない。5月の事件いらい，学生や若い労働者たちが，それぞれの主張や願望を，ありとあらゆる方法でいっせいに表現しはじめたのである。

日本のどちらかといえば画一的で統一行動的な運動に慣れていたわたしにとって，この壁にあらわれたおびただしい数の自己主張は一つの驚きであった。この壁に記された匿名の言葉はわたしのような外国人の注意を引いただけでなく，フランスのジャーナリストや評論家の話題になった。これらの言葉の特色をあらわす用語としてhaïkaï（俳諧）という言葉が使われた。ハイカイというのはすでにフランス語となってフランス語の辞書にものっているが，一般に短い詩形を指し，かなり風刺的なものだと考えている人が多い。また壁文学（リテラチュール・ミュラール）という用語も使われている。「5月革命」がうみだした新しい文学様式ということになるだろうか。壁に書かれた文字は，単なる政治的なスローガンから，明らかに詩の形式をとった表現，さらには引用やパロディーまで多種多様である。

壁文学はすぐれて「革命」の文学である。これらの文字は闘いのあいだに記された。文章の完結していないものもある。書きおえないうちに衝突が始まったのだ。壁に記された文字は，若者たちを行動にかりたてた衝動がどのようなものであったかを語っている。それはさまざまなイデオロギーに深く影響されてはいるが，新しい思想の芽生えを示している。わたしたちは，既成の思考方法やイデオロギーをあてはめて，これらの言葉を解釈し分類するのではなく，これらの言葉のなかに，新しく芽生えつつあるものを感じとり，その存在をさぐりあてねばならない。「5月革命」の壁の言葉は，主として戦いの呼びかけであり，戦う若者の自己主張であるが，時に思想と感情の深い鉱脈をさぐりあてているからである。それにはまた「革命」の詩的な側面を示すと同時に，詩の概念にかんする問いかけを含んでいた。もともと5月の運動そのものが，新しい世代の自己表現という本来文学的な課題をもっていた。もっとも，落書きにすぎないものを必要以上に真面目にとるのは滑稽であろう。しかし壁に記された言葉の多くは，単なる落書きの段階を越えており，その存在とその内容によって，これまでに発表されたいかなる評論や分析にもまして，「5月革命」の独自な性格を雄弁に物語っていると思う。

わたしは叫ぶ　Je crie
わたしは書く　J'écris　（東洋語学校）

到るところに書け。 Ecrivez partout!（エショデ通り）

何かしら言いたいことがあるのだが，それが何かわからない。

J'ai quelque chose à dire mais je ne sais pas quoi.（サンシエ）

書くべきことが何もない　Je n'ai rien à écrire.（サンシエ）

隣人に話しかけよ　Parlez à vos voisins.（サンシエ）

壁の上に書くのはいやだ。
J'aime pas écrire sur les murs.（ナンテール）

壁に耳あり，　Les murs ont des oreilles.
耳に壁あり。　Vos oreilles ont des murs.（シアンス・ポ）

自己の真の欲求と願望を発見し，それに何らかの表現形式を与えることは，既成の社会の束縛から自己を解放する一つの段階である。この一見文学的な欲求は既成秩序の破壊と直接民主主義，あるいは真の社会主義という政治的な目標に通じていた。それ故，彼らはまず書くこと，表現することにこだわり執着したのである。壁に記された言葉の内容は事件の進展とともに変化していった。そのあとを厳密にたどることはむずかしいが，大ままかな段階を追って見ていくことにしよう。

1　はじめの段階（5月3日から5月10日まで）

カルチエ・ラタンの壁に記された文字が，そのおびただしい量と，独自の形式，独自の主張によって一般の注意をひくのは10日のバケリードとソルボンヌの解放（13日）以後のことである。しかしいまにして思えば事件を予告するかのような文字は5月の運動がはじまる以前から現れていた。

自発性　Spontanéité
創造性　Créativité
生　Vie　（サンシエ通り）

この言葉は昨年の秋，わたしがパリに着いたときすでにカルチエ・ラタンの壁に記されていた。最初わたしはおもしろいなと思ったが，それ以上に考えはしなかった。現実に起った5月の事件がこの言葉に光りを与えたのである。この予言的な言葉は

事件の最中にあらためてとりあげられるとともに，そのさまざまなヴァリアントが壁の上にあらわれる。

ここに自発性がある
Ici, on spontane.

創造せよ。　Créez.

むしろ生を！　Plutôt la vie.

われわれは生きたいのだ。　Nous voulons vivre.

5月3日から5月6日の段階において，事件は学生側の抗議運動の激しさとその自然発生的な性格，警察側の暴力によって注目されはじめる。集まった学生たちは「われわれの仲間を釈放せよ」「ソルボンヌを学生の手に」「われわれは1つのグルプスキュール」「十人ばかりの怒れる若者」と口々に叫んでいた。いわゆる政治的な主張は表面に出ていない。しかしこの時期にカルチエ・ラタンにあらわれた壁文学は，この運動がたんに総長や警官にたいする抗議運動にとどまらず，新しい世代の社会制度にたいする根本的な問いかけをふくむ運動であったことを物語っている。

倦怠は訴える。　L'ennui pleure.

都市生活　Urbanisme
清潔　Propreté
性　Sexualité

消費生活を楽しめばたのしむほど
真の生が失われる。
Consommez plus,
vous vivrez moins.

商品は民衆の阿片。

La marchandise est l'opium du peuple.

むだなく生き　Vivre sans temps morts.
自由に享楽し　Jouir sans entraves
下心なく愛を行おう。　Baiser sans carottes.

生をとらえよ。　Prends la vie.

君の欲望を射出せよ。　Ejacule tes désirs,

わめけ。　Hurle.
盗め。　Volez.

人は君の幸福を金で買う　On achète ton bonheur.
君はそれを盗め。　Vole-le.

文化とは生活をひっくりかえすことだ。
La culture est l'inversion de la vie.

アナーキストはいつでも居るよ。
Les anarchistes sont toujours là!

決して勉強するな。
Ne travaillez jamais.

ここに疎外はじまる。
Ici commence l'aliénation.（ジャン・カルヴァン通りの小学校の壁）

CRS. SS
ローマ……ベルリン……マドリッド……ワルシャワ……パリ。

2　バリケードとパヴェ

革命とレジスタンスの伝説のなかで育てられたパリの民衆は，何か事が起ればほとんど本能的にパヴェをはがしバリケードを築きはじめる。警察力が近代化された現在，バリケードは闘争の手段としての実際的な意味よりも，むしろ革命と反抗の儀式として象徴的な意味を強めてきた。

1968年5月10日は，「バリケードの日」としてパリのバリケード伝説に新しい一頁を加えることになるだろう。この日，UNEF. SNE（SUP），「3月22日運動」などの呼びかけに応じて，拘留されている学生の釈放を要求する抗議集会がダンフェール・ロシュローの広場で行われた。約2万5千人の学生たちは近くのラ・サンテ刑務所にデモをかけた後，裁判所や放送局（意図的に真実を歪めて放送したということで，学生の批判をあびていた）のある右岸に向った。しかし各所で警官隊の厚い壁にぶつかって橋を渡ることができず，学生たちはサン＝ミッシェル通りを上って，警官が占拠中のソルボンヌ沿いにリュクサンブール公園に面したエドモン・ロスタン広場に出，そこからゲイ＝リュサック通りに入った。

学生たちは警察に誘導されるようにしてこの場所に入りこんでしまったが，これは危険な位置であった。警官隊はすでにデモ隊を包囲する隊形を整えていた。

22時5分，総長は学生代表と会談する用意があると発表し，リュクサンブール放送の仲介で学生代表が総長に会うことになった。学生たちは長いあいだその場に座りこんで会談のなりゆきを待った。その間，何の連絡もなく武装警官にかこまれて不安と緊張が高まっていった。ついに学生たちはパヴェをはがし，ＣＲＳの鼻先きでバリケードを築きはじめる。0時15分総長はコーン＝ベンディットほか数人の学生代表に会う。1時45分，コーン＝ベンディットが，学生の3点からなる要求（1．逮捕された学生の釈放および特赦。2．全学部の開講。3．警官の退去）が拒否されたことを発表。学生は座りこみを続けていた。

2時15分，内務大臣はバリケード排除の命令を下す。カルチエ・ラタンの60数カ所にバリケードが築かれ，激しい衝突は午前6時ころまで続く。警察側の発表によれば，負傷者367（警官251，学生102），そのうち重態で入院したもの22。逮捕者460（外国人61）。自動車，全焼60，損傷128。11日，ＣＧＴ，ＣＦＤＴ，ＦＥＮなど主要な労働組合が，この日の警官の蛮行に抗議して13日に24時間のゼネストを行うことを決定。5月10日のバリケードはパリ市民を完全に学生の側につけ，「5月事件」を「5月革命」に導く。

（5月の末にエデイション・デュ・スゥイユから「1968年5月10日」と題する戯画が

出版された。「3点からなる演劇によるマニフェスタションと一つのシェーマ」という副題が付けられている。3点とは学生代表が総長に要求したあの3つの要求である。この芝居は登場人物の全員が「今日，1968年5月10日，わたしは革命を始めた」という言葉を叫んで終る。主語が「われわれ」でなく，「わたし」であることがこの場合重要なのだと思う。作者はリュック・ド・グースチーヌ。)

1968年5月10日のコミューンばんざい！

Vive la Commune du 10 mai 1968 !

ぐれん隊ここに戦う（22日運動)。

Ici s'é-bat la pègre.（シァンス・ポ)

革命バンザイ。　Vive la révolution.

学生と労働者の連帯を。　Etudiants-ouvriers solidaires.

バリケードは通りを塞ぐが道を開く。

La barricade ferme la rue, mais ouvre la voie.（サンシエ)

バリケードは革命的高揚の最もたしかなしるしである。

（トレーズ，1931年6月ルーベのバリケード)

La barricade est l'indication la plus sûre de l'essor révolutionnaire .

Thorez. Juin 1931, Barricade de Roubaix.（ソルボンヌ)

都市ゲリラ。　Guérilla urbaine.

焔（砲火）が実現する。　Le feu réalise!（ナンテール)

君の恋人を抱け，だが銃をもつ手をぬるゆるな。

Enbrasse ton amour sans lâcher ton fusil.（オデオン)

フリック・ＳＳ

ＣＲＳ・ＳＳ

ＣＲＳ＝裏切者の奴隷

ただ一人（ドゴールのこと）のみ存在す。

Seul l'un existe.

売りたし。皮の上着。対ＣＲＳデモ用特製。大型。保証付。100 フラン。

A vendre. *Veste en cuir.* Spéciale manifestation garantie ant-C.R.S., Grande taille, Prix 100F （ナンテール）

パリではラマルチーヌ以後,	A Paris après Lamartine
ユゴーやウージェーヌさえ	Et Hugo même Eugène
涙を流させることを考えなかった。	N'y avait pas pensé pour pleurer
今では泣かすのは催涙弾（ラクリモジェーヌ）だけ。	Il n'y a que les lacrymogènes. （サンシエ）

（ＣＲＳは催涙弾を乱用した。街頭で衝突が起るとたちまち無数の催涙弾が炸裂し，通行人はハンケチで顔をおさえ泣きながら走った。催涙ガスは時には24時間のあいだ通りにただよって商人や通行人を苦しませた。催涙ガスは路上にただようだけでく地下鉄のなかにまで降りてゆきメトロの客はしばしば泣きながら互に顔を見合わせて苦笑した。催涙弾は決して無害ではない。催涙ガスの中毒で倒れた女子学生もいれば，失明の危険にさらされている人もいる。顔面に火傷を負った学生も多い。一人の労働者は催涙弾の爆風に吹き飛ばされて，転倒したときに後頭部を打って死んだ。衝突のときにナイフで刺されて死んだと発表された青年は，実は催涙弾の被害者であることが最近になって発表された。青年の腹の中から催涙弾の破片が出て来たのだ。）

禁ずることを禁ず。1968年5月10日。

Défense d'interdire. Le 10 mai 1968.

神もなく師もなく。

Ni dieu ni maître.

広告が君を操っている。

La publicité te manipule.

既成の社会から倦怠がにじみ出る。

L'ennui transpire dans l'achèvement.

社会は人食い花。

La société est une fleur carnivore.

最も美しい彫刻，それは砂岩のパヴェ，
批評する重いパヴェ，ポリ公の口にめがけて投げつけるのはこのパヴェだ。

La plus belle sculpture, c'est pavé de grès, le lourd pavé cubique, c'est le pavé qu'on jette sur la gueule des flics.

あらゆる思考のゆきつくところ，それはパヴェ。

L'aboutissement de toute pensée, c'est le pavé.　(ソルボンヌ)

あなたが好き！　ああ，その言葉をパヴェを片手に言って下さい！

Je t'aime !!! Oh, dites-le avec les pavés !!!!　(ナンテール)

パヴェにかこまれ狂気悶絶す。

Je jouis dans les pavés.(ナンテール)

パヴェ。一つの稜が10センチほどの立方体に削られた砂岩。パリの石畳の構成要素。投石とバリケードの基材。ＣＲＣに対する強力な武器。これがまともに当ると屈強の警官もその場にくずおれてしまう。学生たちは親しみをこめた特別の言いかたで「パヴェ」という言葉を発音する。ＵＮＥＦの最後の抗議デモが行われた６月11日の午後７時ごろ，東駅にむかうメトロはデモ姿の学生たちで満員だった。１人の学生が大きなトランクを２つ重そうに車内にもちこんだ。誰かが「カクテル・モロトフか？」とたずねた。その学生は「パヴェだ」と答えて片目をつぶってみせた。またあるアメリカ人の若い詩人は，逮捕されたときポケットに入れたパヴェを捨てるひまがなかった。彼は秘書をしている恋人にパリのスヴニールとして贈り，文鎮がわりに使ってもらうのだ，と巧みに主張して国外追放をまぬがれたという。事件の最中に革

命情報委員会が「パヴェ」という新聞を出した。ローザ・ルクセンブルクの「創造的な力」にかんする一節をエピグラフにして，一面にはバリケードに関する解説がのせられていた。一号で終ってしまったが飛ぶように売れていた。この新聞の隅にも「パヴェにかこまれ狂気悶絶す」という言葉が印刷してあった。

パヴェの下にある　Dessous les pavés
それは砂浜……　C'est la plage……（ソルボンヌ）

パヴェをはがしてみるとその下から思いもかけず白い砂の層が現れたのであった。じっさい学生たちは行動をとおしていかに多くの思いがけないものを発見していったことであろう。このような感受性をもっておし進められた運動は信頼できると思う。

3．ソルボンヌ解放

5月13日。全フランスをおおったゼネストと抗議デモ。パリでは80万の市民の大示威運動。市中をかけめぐった若者たちのロング・マルシュ（長征）。「ドゴール人殺し」，「ＣＲＳ・ＳＳ」「権力は街頭にある」，「労働者と学生の連帯を」，「10年は長すぎる」「ベルリン，ローマ，ワルシャワ，パリ」……人々は口々に叫んでいた。

ソルボンヌが解放された。そこでは若さと，詩と，批評と，あらゆる可能性がわきかえっていた。そこではあらゆる既成の権威が否定され，自発性と創造力が主導権をとり，真の革命的な伝統がよみがえろうとしているかに思われた。5月の祭り。リラとマロニエと桜ん坊の季節。解放された情熱と喜びのなかで独創的な革命がおこなわれようとしていた。3つの要求はすでに現実化されていた。困難や矛盾ががなかったわけではない。むしろ彼らの試みが進行すると共に，彼らはソルボンヌをとりまく壁の厚さを知ったはずである。しかし幸福な瞬間であった。誰もがこの幸福な瞬間が長く続くはずのないことを知っていたから，彼らはいっそう「現実」に執着していた。ソルボンヌで若者たちのエネルギーに圧倒されなかった人は少ないと思う。

学生たちはシャペルの塔に赤旗と黒旗をかかげ，白い壁に黒い大きな文字で彼らの言葉を記しはじめた。

先生，あなた方はわれわれを老いさせる。

Professeurs, vous nous faites vieillir.（ソルボンヌ）

教授諸君，君たちは君たちの教養と同じように古い，
君たちの近代主義は警察の近代化にすぎない。
教養は紛々だ。（恐れる若者たち）

Professeurs, vous êtes aussi vieux que votre culture.
Votre modernisme n'est que la modernisation de la police.
La culture est en miettes　(les enragés)　（ソルボンヌ）

シャペルの影でどうして自由な思考ができようか？

Comment penser librement à l'ombre d'une chapelle?　（ソルボンヌ）

たとえ神が，存在しても，それを抹殺しなければならないだろう。

Même si Dieu existait il faudrait le supprimer.　（ソルボンヌ）

学んだことはすべて忘れ，
夢想することからはじめよ。

Oubliez tout ce que vous avez appris,
Commencer par rêver.（ソルボンヌ）

精神の兵営はごめんだ。

Pas de caserne pour l'Esprit.

想像（イマジナシヨン）力を権力の座に！

L'imagination au pouvoir!

情熱を解放せよ。

Libérez les passions.

表現を解放せよ。

Libérez l'expression.

われわれが生きるじゃまだてをするな。

Laissez-nous vivre.

青春は永遠の陶酔，理性の熱病。

La jeunesse est une ivresse éternelle, c'est la fièvre de la raison.

わたしの欲望(デジール)は現実(レアリテ)。

Mes désirs sont la réalité.（ナンテール）

わたしは自分の欲望(デジール)を現実(リアリテ)とみなす，なぜならわたしは自分の欲望の現実性(リアリテ)を信じているから。

Je prends mes désirs pour la réalité, car je crois en la réalité.（ソルボンヌ）

現実(リアリテ)を望むのはよいことだ　。だが欲望を実現(レアリゼ)するのはさらによいことだ。

Désirer la réalité c'est bien ! réaliser ses désirs c'est mieux.（ソルボンヌ）

自由とはあらゆる罪を含む罪，それこそわれわれの絶対の武器。

La liberté est le crime qui contient tous les crimes. C'est notre arme absolue.（ソルボンヌ）

夢は現実。

Le rêve est réalité.（サンシエ）

来た　Je suis venu
見た　J'ai vu
信じた　J'ai cru（ソルボンヌ）

ソルボンヌは万人に解放されていた。人々は「文化革命」と呼ばれるこの独創的な実験に参加するために，あるいは単なる好奇心からそれを見るために，ソルボンヌの内庭にどっとおしよせた。ソルボンヌは昼夜をとわず人間であふれていた。

走れカマラード，そうすれば古い世界は君の背後に去る。

Cours, camarade, le vieux monde est derrière toi. （ソルボンヌ，オデオン）

革命ははじまっている。

La révolution est commencée. （ソルボンヌ）

冒険をくわだてる怒れる（アンラジェ）　若者バンザイ。

Vive les enragés qui bâtissent des auentures.　（ソルボンヌ）

バブーフ・バンザイ！

Vive Babeuf ！　（ソルボンヌ）

毛沢東バンザイ。(2000年も生きてくれ)

Vive Mao Tsé Toung! (qu'il vive 2000 ans !)　（リセ・ビュフオン）

ドゴール・バンザイ（あるフランス人マゾシスト）

Vive de Gaulle　(un Frnaçais masochiste)

文化的煽動に参加しよう。

Participez à l'agitation culturelle. （ソルボンヌ）

1848年いらいの大掃除。

1789

1830

1848

1871

1936

1968　（ソルボンヌ）

わたしの内にある過去の日々がよみがえる

革命の歌の日々　　そして

かつてこの自由の聖地が
わたしの体に与えたような身ぶるい。

Jours du passé en moi s'éveillent
Jours des Chansons de la révolution
et un frisson comme jadis
mon corps domine ce pays consacré de la liberté.（ソルボンヌ）

フランスの国家が若者たちの反抗によってゆらいでいるいま，国家によって抑圧されているあらゆる国籍の人々には，くびきを脱するまたとないチャンスである。ブルトン人，アルザス人，カタロニア人，フランドル人，バスク人，アンティル諸島人，コルシカ人，オック人，レユニオン島人，そしてとりわけ，これら抑圧されている民族（エトニー）の若者たちは，自らを解放することによって，同時にフランスの若者たちの解放に貢献することができるのだ。

A l'heure où l'Etat frnaçais est secoué par la révolte de sa jeunesse, les nationalités opprimées par cet Etat ont une importante occasion pour secouer le joug: Bretons, Alsaciens, Catalans, Flamands, Basques, Antillais, Corses, Occitans, Réunionnais et particulierement la jeunesse de ces ethnies opprimés peuvent en se libérant contribuer en même temps à l'affranchissement de la jeunesse française（ソルボンヌ）

孤独でなく連帯を。

Soyez solidaires et non solitaires.

孤立は悲しみを育てる。

L'isolement nourrit la tristesse.

大衆の革命的エネルギーを解放するために栓をぬけ！

Que saute le bouchon pour libérer l'énergie révolutionaire des masses.
（ソルボンヌ）

われわれは何も要求しない。　On ne revendiquera rien,
われわれは何も請求しない　On ne demandera rien,
われわれは奪う　On prendra,
われわれは占拠する。　On occupera.　（ソルボンヌ）

主人をかえるのはよして，われわれがわれわれの生の主人になろう。

Ne changeons pas de maître, devenons nous les maîtres de notre vie.
（ソルボンヌ）

残酷になろう。

Soyons cruels.（ソルボンヌ）

それで，もしソルボンヌを焼いたら？

Et si on brûlait la Sorbonne?（ソルボンヌ）

歴史の示すところでは，人間は自己の生命を賭けるかぎりにおいて，反乱をおこす権利があったのだと思う。（ジュール・ヴァレス）

Je vis que dans l'histoire on avait le droit de se révolter pourvu qu'on jouât sa vie.（J. Vallès）（ソルボンヌ）

直接制民主主義バンザイ！

Vive la démocratie directe !

国家を倒せ。

A bas l'Etat.

国家とはわれわれ一人一人のこと，

L'Etat c'est chacun de nous.（マラケ河岸）

スターリンの腐肉はくたばれ。

A bas la charogne stalinienne.

官僚を殺せ。書類と言葉は沢山だ。

Tuez les Bureaucrates. Assez d'actes, des mots. （ソルボンヌ）

ジャーナリストとジャーナリストを操ろうとしている連中を打倒せよ。

A bas les journalistes et ceux qui veulent les ménager. （ソルボンヌ）

現代のマゾシスムは改良主義の形をとる。

Le masochisme aujoud'hui prend la forme du réformisme（ソルボンヌ）

フランス共産党は政府を変えることを望むが社会を変えることを望まない。
労働組合は淫売屋だ。

Les syndicats sont des bordels. （ソルボンヌ）

主人に従うのはうんざりした
主人を選ぶのはそれ以上に愚かなこと。

Il est douleureux de subire ses chefs,
il set encore plus bête de choisir. （ソルボンヌ）

セックスをすればするほど革命がしたくなる。
革命を行えばおこなうほどセックスがしたくなる

Plus je fait l'amour, plus j'ai envie de faire la Révolution,
Plus je fais la révolution, plus j'ai envie de faire l'amour. （ソルボンヌ）

中途半端な革命を行う者は墓穴を掘るだけだ。

Ceux qui font les révolutions à moitié ne font que se creuser un tombeau.

革命はそのために自己を犠牲にしなければならなくなった瞬間に終る。

La révolution cesse dès l'instant qu'il faut se sacrifier pour elle.

われわれはみんなドイツ系ユダヤ人。

Nous sommes tous des juifs allemands. （ソルボンヌ）

世界の怒れる(アンラジェ)若者たち，団結せよ！
〔世界の億万長者たち，団結せよ，風向きが変わったぞ！〕
Enragés de tous les pays, unissez-vous!

最後の社会学者が最後の官僚の腹わたで首をくくられたとき，それでもわれわれにはまだ問題が残っているだろうか？
Quand le dernier des sociologues aura été pendu avec les tripes du dernier bureaucrate, aurons-nous encore des 《problèmes》? (ソルボンヌ)

マルクーゼとともにエロス化された新しい社会を求めよう。
Avec Marcuse, pour une société érotisée et nouvelle. (ソルボンヌ)

疎外された労働，疎外された余暇。
A travail aliéné, loisir aliéné. (ソルボンヌ)

いま始まっている革命は単に資本主義社会を問題にするだけでなく，
工業社会を問題にするだろう。
消費社会は非業の死をとげねばならぬ。
疎外社会は非業の死をとげねばならぬ。
われわれは新しい独創的な社会を望む。
われわれは飢えて死なない保証があるかわりに退屈で死にそうな世界を拒否する。

この夏はギリシャに行くな。ソルボンヌにとどまれ。
N'allez pas en Grèce cet été. Restez à la Sorbonne.　(ソルボンヌ)

*　　*　　*

人が来る前には森があった
人のあとに砂漠が残る。
La forêt précède l'homme,
le désert le suit. (ソルボンヌ)

すべてはミスチックではじまりポリチックで終わる。（ペギー）

Tout commence en mystique et finit en politique. (Péguy) (ソルボンヌ)

変に見えない物の見方は偽りである。（ヴァレリー）

《Toute une des choses qui n'est pas étrange est fausse.》(Valéry)

(ソルボンヌ)

破壊の情熱を！　それは美しい創造主だ。（バクーニン）

La passion de la destruction ! est une jolie créatrice. (Bakounine)

(ソルボンヌ)

芸術は死んだ，芸術の屍を消費するな。

芸術は死んだ，われわれの日常生活を解放しよう。

L'art est mort, ne consommez son cadavre.

L'art est mort, libiérons notre vie quotidienne. (ソルボンヌ)

芸術とは一種アカデミックなノイローゼ。

L'art est névrose académique. (ソルボンヌ)

君たちもまた盗むことができる。

Vous aussi vous pouvez voler. (ソルボンヌ)

生は彼方に。

La vie est ailleurs. (ソルボンヌ)

現在の生があり

現在しかないのだ。

La vie de la présence,

rien que de la présence. (ソルボンヌ)

次の二つは，あらゆる抗議デモが禁止され，11のグルプスキュールが非合法化された後のソルボンヌの回廊に，紙に書いて張り出されていたものである。

黒人は死をおそれない
われわれは常に死んでいく
われわれは君たちの牢獄で死んでいく
われわれは君たちのゲットーで死んでいく
われわれはまいにち幾千となく死んでいく。(ソルボンヌ)

革命は一種の祭りである。
われわれに協力してあらゆる国に
民衆の永続する壮大な祭の火蓋を切れ
芸術家たちよ，街頭に出よ
行動的なストライキを行え
革命の祭りを組織せよ
生命の太陽と歓喜のために権利を要求せよ。(ソルボンヌ)

4．オデオン占拠

5月15日22時45分，「3月22日運動」に属する「文化行動グループ」を先頭に，約1000人の学生たちがカルチエ・ラタンにある国立劇場オデオン座を占拠した。学生たちがオデオンにむかったのは，それがソルボンヌに近い（数100m）という戦術的な理由もあるが，同時に劇場がフランス文化のなかで占める大きな位置を考えなければならない。劇場は都市文化の中心であり，ブルジョワ文化の象徴であった。破壊するにせよ創造するにせよ，フランスの学生にはフランス文化の担い手という意識が非常に強い。

占拠後の劇場の運営は，学生，俳優，労働者からなる「革命行動委員会」にゆだねられ，劇場は1日24時間，民衆に開放されることになった。ここの屋上にもやはり赤旗と黒旗がひるがえり，「オデオンは開かれている」という大きな文字が布地に記されている。入口には「学生と労働者の劇場・入場無料」という張紙。各地の情報を伝える掲示板。劇場は学生，労働者，芸術家の結合の場所として，自由討議が続けられていた。オデオンで行われたことはソルボンヌとはかなり異なっていた。ここでは革命と行動のプランよりも内面における革命がより多く問題にされていた。

劇場で人々は自由に発言した。人々は好んで自己について語った。年老いた労働者がとぎれとぎれの言葉で彼の長い不幸な生涯について語る情景が見られた。幾十年のあいだ腹のなかにおさえつけられていた不満や憤りが，はじめて発言の場所をえたの

だ。学生たちは自己の内面にひそむブルジョワ性を問題にした。劇場の構造は観客が互いに自己の経験を語りあうのに適していた。まいにち大勢の人々がおしかけていつも満員だった。ここで幾時間かをすごしたことのある人は，目前に展開しているものが，それ自体一つの新しい様式の演劇であることに気がついたと思う。親密な連帯感のなかで，さまざまな人生の断面や，さまざまな人間の内面が語られていた。俳優の存在しない芝居。観客はもはや受動的な存在ではなかった。新聞や雑誌はこの芝居を「政治的ハプニング」と呼んでいた。

暴力団まがいの連中や浮浪者がはいりこんで末期的な徴候が現われはじめるまで，劇場は清潔をたもっていた。落書きは主として建物の通りに面した壁，入口のホール，廊下，楽屋，舞台の鉄幕の上などに記されたり張られたりした。

国会がブルジョワの劇場になるとき
ブルジョワの劇場が国会になる。

Quand l'assemblée nationale devient un théâtre bourgois
Tous les théâtre bourgois doivent devenir des assemnlées nationales.（オデオン入口のホール）

私服で訪れたＣＲＳは階段に充分気をつけて下さい。

CRS qui visitez en civil, faites très attention à la marche.（入口のホール）

ＣＲＳの諸君，ここで君たちの契約を破棄することができます

CRS vous pouvez résilier votre engagement ici.（入口のホール）

マルローは手に触れるものをすべて汚す。

Malreaux salit tout ce qu'il　touche.（オデオン）

マルローのパリ洗浄運動を皮肉っている。マルローは学生たちのあいだで最も人気のある作家の一人。学生たちはオデオン座の最高責任者であるマルローに，劇場で学生たちと討論するように求めた。マルローは応じなかった。マルローはしばらく発言をひかえていたが，５月30日のドゴール派のデモでは先頭に立ち，その後の発言で反「革命」の立場を表明した。６月の末にカルチエ・ラタンの劇場にスペイン戦争の記録映画「マドリッドに死す」がかかったとき，マルローの名前が出てくると満員の観客がいっせいに笑った。

＊　＊　＊

誰が創る？　何故？

Qui crée ? Pourquoi ?　（オデオンの鉄幕に）

諸君は消費者か参加者か？

討論の場か，疎外されたままのお喋りの場か？

Etes-vous des consommateurs ou bien des participants ?

Lieu de parole ou bien de parlerie alienée ?　（オデオン）

まず孤独（ソリテール）になり，次いでそして最後に連帯（ソリデール）する。

Solitaire d'abord solidaire ensuite et enfin.　（オデオン）

まず自分自身にたいして異議を申し立てよ。

D'abord contestez-vous vous-même.　（オデオン）

股ボタンをあけると同じくらいしばしば君の頭のボタンをあけよ。

Déboutonnez votre cerveau aussi souvent que votre braguette.

すべてはダダ。

Tout est dada.　（オデオン）

芸術は糞だ。

L'art c'est de la merde.（オデオン）

詩は街頭にある

La poésie est dans la rue.（オデオン）

現在に生きること。

Vivre au présent.　（オデオン）

セックスをして，それからまた始めよ。

Faites l'amour et recommencez.　（オデオン）

輝く星を世界にもたらすためには自己のうちにカオスをもっていなければならない。
（ニーチェ）

Il faut porter encore en soi un chaos pour pouvoir mettre au monde une étoile dansante (Nietzché)　（オデオン）

わたしは人々を揺り動かし不安がらせたいと思う。
わたしはパンを売らず酵母を売る。（ウナムーノ）

Je me propose d'agiter et d'inquiéter les gens.
Je ne vends pas le pain mais la levure. (Unamuno)（オデオン）

社会主義者の意識に到達するためには，収益や産業利潤に有罪宣告を下さねばならない。新しい人間に到達するためには，まず大衆の心性を変えねばならない（チェ・ゲバラ）

Il faut condamner la rentabilité, le profit industriel, pour parvenir à une conscience socialiste. Il faut d'abord changer la mentalité de la masse pour parvenir à un homme nouveau. (Ché)　（オデオン）

*　　*　　*

われわれにはヴィタミンCが欠如している。

Nou manquons de vitamines C.（オデオン）

同志諸君，24時間中に5時間は眠る必要がある。われわれの革命を成功させるためにわれわれは諸君の協力を必要としている。

Camarades, 5h de sommeil sur 24 sont indispensables:
nous comptons sur vous pour la Révolution.　（オデオン）

自由結婚（同棲）バンザイ。

Vive l'union libre !（オデオン）

全権力を労働評議会へ（怒れる若者）

全権力を怒れる若者評議会へ（労働者）

Tout le pouvoir aux conseils ouvriers (un enragé)

Tout le pouvoir aux conseils enragés (un ouvrier)　（サンシエ）

労働者よ，君は25才だ。だが君の組合は前世紀の遺物。それを変えるために，われわれに会いに来てほしい。

Travailleur : tu as 25 ans, mais ton syndicat est de l'autre siècle. Pour changer cela, viens nous voir.（オデオン）

どうぞクーデタをやって下さい。

S.V.P. Coup d'Etat.　（オデオン）

国民投票，すなわち策略ついで独裁。

Référendum　= roublardise puis dictature.　（オデオン）

ド・ゴール，ノン。　De Gaulle, Non.

ミッテラン，ノン。　Mitterand, Non.

人民権力，ウイ。　Pouvoir populaire, Oui.（美術学校）

コーン・ベン・ディットをエリゼ宮に！　（コーン・ベン・ディットを中学に！）

Cohn-Bendit á l'Elysée! [Cohn-Bendit au lycée!]（ソルボンヌ）

国民投票，すなわち彼の鉄鎖と彼の砲弾にたいする賛成投票。

Référendum : voter sa chaîne et son boulet.　（オデオン）

5．ナンテール，サンシエその他

ナンテール。パリ西方の郊外に軍の施設の跡を利用して建てられた新設（1964年）学部。文学部と法学部，それに学生寮がある。学生数は12000。建物は新しく近代的で清潔だが，殺風景なキャンパス。雑草に混ってひなげしが咲いていた。学生寮の窓から貧民街が見えている。共産党が多数を占める労働者の町。「5月革命」の発生地。5月14日，教授と学生の集会で学部の自治（ファキュルテ・オートノーム）が宣言さ

れた。白い壁が落書きで埋められたのもナンテールが一番早かった。

墓地（大学の建物の外側の壁に）

Cimetière

自由の敵に自由を与えるな！

Pas de liberté aux ennemis de la liberté.　（ナンテール）

ジーグを踊ろう。

Dansons la Gigue.　（ナンテール）

革命よ，わたしはあなたが好き。

Révolution, je t'aime.　（ナンテール）

彼らの狂気には筋のとおったところがある。（ハムレット）

Il y a de la méthode dans leur folie. (Hamlet)　（ナンテール）

おれの欲望は現実だ。

Mes desirs sont la réalité.　（ナンテール）

アナルシーとは「僕は」ということ。

L'amarchie c'est je.　（ナンテール）

明日は享楽できるという見通で今日の倦怠を慰めることは決してできない。

La perspective de jouir demain ne me consolera jamais de l'ennui d'aujourd'hui.（ナンテール）

あなたの子供を保育所に入れて，学部の勉強を続けて下さい。

Mettez vos enfants　à la garderie et suivez les travaux de la fac.

（ナンテール）

ナンテールでは貧民街の子供たちをあずかっていた。ソルボンヌでも保育所が設け

られ，かなり活用されていた。ソルボンヌが再び閉鎖された後，保育所はサンシエに移って続けられた。サンシエが閉鎖されてから保育所はどこに移っただろうか？　おそらく続けることは不可能になったと思う。保育所はたちまち経済的な困難に直面したが，「5月革命」にこういう側面のあったことはぜひ記憶しておかねばならない。

行為が意識を決定する。

L'acte institue la conscience.（ナンテール）

快楽に課せられた制限は生きる快楽を無制限に呼びおこす。

Les réserves imposées au plaisir [existe] excite le plaisir de vivre sans réserve.（ナンテール）

権力は銃口にある。

Le pouvoir est au bout du fusil.（ナンテール）

人類（ユマニテ）〔反革命の雑巾である「ユマニテ」はくたばれ〕は，最後の資本家が最後の官僚の腹わたで首をくくられるとき，はじめて自由に生きることができるだろう。

L'humanité [à bas l'Huma, torchon contre-revolutionaire, ne pourra vivre libre que lorsque le dernier capitaliste aura été pendu avec les tripes du dernier bureaucrate.（ナンテール）

政治家と奴らの汚いデマゴギーの犠牲にならないように気をつけよう。
自分たちだけをあてにしよう。
自由のない社会主義，それは兵営だ。(バグーニン)

Ne nous laissons pas bouffer par les politicards et leur démagogie boueuse. Ne comptons que sur nous-mêmes .
Le socialisme sans liberté c'est la caserne. (Bakounine)（ナンテール）

あえてやろう。
この言葉のなかに現在のあらゆる政治が含まれている。

（国民公会におけるサンジュスト）

Osons.

Le mot renferme toute la politique de cette heure. (Saint-Juste à la Convention) (ナンテール)

おれは勉強がきらい。
それに，愛は革命が好き（恐れる若者の一人）

Je n'aime pas le travail,
et l'amour aime la Révolution. (Un des enragés) (ナンテール)

新たな性的倒錯を見出せ。

Inventez de nouvelle perversions sexuelles. (ナンテール)

*　　*　　*

サンシエ。カルチエ・ラタン，サントゥイユ通りに新設された，パリ大学文学部（ソルボンヌ）サンシエ分校。ここに集まる学生は若く（主としてプルミエ・シクルとドゥージェム・シクルの学生）建物の感じも日本の国立大学の教養部に似ている。ここの新しい壁も張紙や落書きで埋められた。

シジフォス！

Sisyphe！ (サンシエ)

すでに幸福な10日間が。

Déjà 10 jours de Bonheur. (サンシエ)

あなたの心の窓をあけよう。

Ouvrez les fenêtre de votre coeur. (サンシエ)

レアリストになり
求めよう，不可能を。

Soyez réalistes
demandez l'impossible. (サンシエ)

人間解放は全的でなければありえない。

L'émancipation de l'homme sera total ou ne sera pas.（サンシエ）

陛下，これは革命ではございません。これは変化でございます。

Ce n'est pas une révolution, Sire, c'est une mutation.（サンシエ）

毛沢東が言った。セックス，それはよいことだ。だが度をすごしてはならない。

ＳＥＸＥ c'est bien, a dit Mao, mais pas trop souvent.（サンシエ）

自由恋愛（だがここではやめておこう！）
何故？
疎外された愛にとってすべては予見されている。

Amour libre. (Mais pas ici!)
Pourquoi?
Tout y est prévu pour l'amour aliéné.（ナンテール）

風が起る。生きるように努めなければならない。

Le vent se lève, il faut tenter de vivre.（ナンテール）

堀辰雄は同じヴァレリーの詩句を「風立ちぬ，いざ生きめやも」と訳して小説「風立ちぬ」を書いた。いまフランスの学生たちは同じ詩句に革命の息吹を与えようとしている。

＊　＊　＊

ポリ公はわれわれ各自の内部に眠っている
われわれの内なるポリ公を殺せ！

Un flic dort en chacun de nous,
il faut le tuer.（サンシエ）

われわれの近代化は警察の近代化にすぎない。

Notre modernisation n'est que la modernisation de la police.（ナンテール）

大臣たちのメニュー
松露をそえた若鶏（若鶏（プーレ）は俗語で警官のこと）
あつあつのアナーキストの脳みそ
榴弾の肝
パヴェをかけたバリケード
挑発者のあみ焼
怒れる若者のスフレ
ガス入り水は飲み放題。

A la table du Ministre :
Poulet truffé.
Cervelles d'Anar fumées.
Foie de grenades.
Pavés sur barricades.
Grillade de provos.
Soufflé d'enragés.
Eau gazeuse à discrétion.（ナンテール）

消費生活をやめよう。マルクス。

Ne consommons pas (Marx)（サンシエ）

産業化がわれわれを脅かす。
ゴムの乳首が社会を食肉性にする。

L'industrialisation nous menace.
Les tétines en caoutchouc rendent la société carnivore.（サンシエ）

ニヒリズムはおのずと始まる。

Le nihilisme doit commencer par soi-même.（サンシエ）

試験＝隷属，社会的昇進，等級に分けられた社会。

Examen = servilité, promotion sociale, société hiérarchisée.

ロボットでなく，奴隷でなく。

Ni robot, ni esclave. (サンシエ)

一般意志は将軍の意志に反対する。

La volonté générale contre la volonté du général. (サンシエ)

投票は売淫。

Scrutin putain. (サンシエ)

*　　*　　*

誇張せよ，それが創造のはじまりだ。

Exagérer, c'est commencer d'inventer. (サンシエ)

新しさ(ヌヴォーテ)は革命的だ，真実も同じ。

La nouveauté est révolutionnaire, la vérité aussi. (サンシエ)

行為が自発的であるとき，それは自己のうちに他者の実現をもたらす。

L'acte est spontané et porte en soi la réalisation de l'autre. (サンシエ)

われわれは革命について思弁をろうするためにソルボンヌに行って時間をつぶすのか？あるいは，われわれの言葉と行為を一致させるために行くのか？

今日，労働者が主導権を奪った工場では素晴らしい闘争が進展している。いっせいに立ち上がって，工場に，作業場に，貧民街に出かけよう。「民衆，民衆のみが歴史の原動力であり，世界史の創造者だ」(毛沢東)。

Allons-nous passer notre temps à la Sorbonne à spéculer sur la Révolution ? Ou allons-nous mettre nos actes en accord avec nos paroles ?

Aujourd'hui de magnifiques luttes se développent dans les usines dirigées par les ouvriers. Levée en masse vers les usines, les chantiers, les bidonvilles. 《Le peuple, le peuple seul est la Force

motrice de l'histoire, le créateur de l'histoire universelle》
(Mao Tsé-Toung)　(サンシエ)

7月5日未明，サンシエを占拠中の学生を排除にむかった警官たちは，壁に記された次の言葉を読んだはずである。

やくざな者たちよ，君たちは革命を過去の思い出(スヴニール)にしたがっている。
だが人々は，革命についてふたたび語りはじめるだろう。
Charognes, vous voulez faire de la révolution en souvenir.
On en reparlera.　(サンシエ)

*　*　*

学生による占拠と，さまざまな政治的文化的活動が行われのはソルボンヌやサンシエに限らなかった。エコル・ノルマルやシアンス・ポと呼ばれている政経学院，美術学校，音楽学校などのグランド・ゼコル。それにコンンドルセ，アンリ四世，サン＝ルイなどリセの活動が目立っていた。それらの学校の壁や塀，あるいはその近くの街角に記された言葉のなかからいくつか選んで書きとめておこう。

急げ！
Ｖｉｔｅ（コレージュ・ド・フランスの壁に）

想像力(イマジナション)が権力をとる。
L'imagination prend le pouvoir.（シアンス・ポ）

幸福とはシアンス・ポにとって一つの新しい観念である。
Le bonheur est une idée neuve à Science Po.　（シアンス・ポ）

幸福状態を宣言する。
Je décrète l'état de bonheur.（シアンス・ポ）

行動が分裂をのりこえ，解決を見出す。

街頭における行動を。

L'action permet de surmonter les divisions et trouver des solutions.

L'action est dans la rue.

階級闘争を決して忘れないようにしよう。

N'oublions jamais la lutte des classes.（美術学校）

清潔　La propreté

抑圧　répression　（美術学校）

自主管理を求めるだって？　それなら自己所有からはじめなさい。

Vous demandez l'autogestion?

Commencez par l'autopropriété.（シアンス・ポ）

1968年において自由であるとは参加することだ。

Etre libre en 1968, c'est participer.

68年5月ーフランスはフランスの占拠にはげむ。

Mai 68：La France vaque　à ses occupations.（シアンス・ポ）

あらゆる革命家の義務は革命を行うことである。

Le devoir de tout révolutionaire est de faire la révolution.

（シアンス・ポ）

われわれは有史以前の左翼をもっている。

Nous avons une gauche préhistorique.

永遠の異議申し立てを。

Contestation permanante.（シアンス・ポ）

人は純潔無垢で政治を行いはしない（サン=ジュスト）

《On ne fait pas de politique innocemment.》（Saint-Juste）

（シアンス・ポ）

権力が大学をにぎっていた
学生が大学を奪いとった
権力が工場をにぎっていた
労働者が工場を奪いとった
権力がＯＲＴＦをにぎっていた
ジャーナリストがＯＲＴＦを奪いとった
権力が権力をにぎっている
権力から権力を奪いとれ

Le pouvoir avait les universités,
Les étudiants les ont prises.
Le pouvoir avait les usines,
Les travailleurs les ont prises.
Le pouvoir avait l' O.R.T.F.,
Les journalistes lui ont pris.
Le pouvoir a le pouvoir,
Prenez-le lui.（シアンス・ポ）

ブルジョワジーはすべてを堕落させる以外の快楽をもたない。

La Bourgeoisie n'a pas d'autre plaisir que celui de les dégrader tous.
（法学部）

反抗，反抗のみが光明を見出す。そしてこの光明はただ三つの道をとる。詩，自由，そして愛。（アンドレ・ブルトン）

La Révolte et la Révolte seule est créatrice de la lumière, et cette lumière ne peut emprunter que trois voies : la poésie, la liberté et l'amour.（André Breton）.　（法学部）

赤い娘たちよ常により美しくあれ。

Jeune femmes rouges toujours plus belles.　（医学部）

ブラク・パワーが白人を立ちあがらせる。

Black power pour dresser les Blancs.（新医学部）

役人根性は君たちの内にある。

Le Mandarin est en vous.（新医学部）

人間はルソーの言う善良な野蛮人ではなく，教会やロシュフコーの言う堕落した悪人でもない。人間は圧迫されれば怒り出し，自由であれば優しくなる。

L'homme n'est ni le bon sauvage de Rousseau, ni le pervers de l'église et de la Rochefoucaud, Il est violent quand on l'opprime, il est doux quand il est libre.（医学部）

赤にたいする恐怖は角のある動物にまかせておこう。

Laissons la peur du rouge.
Aux bêtes à cornes（美術学校）

われわれはみな好ましからざる人物。

Nous sommes tous des "indésirables."（美術学校）

大学の終焉。

Fin de l'Université.（美術学校）

正しい考えはどこから来るか？　天から降って来るか？　否。それは生得のものであろうか？　否。正しい考えは社会的実践 — 階級闘争，生産のための闘い，科学的実験 — からのみもたらされる。(毛沢東)。

D'où viennent les idées justes ? Tombent-elles du ciel ?
Non. Sont-elles innée?
Non. Elles ne peuvent venir que de la pratique sociale : la lutte de classe, la lutte pour la production et l'expérimentation scientifique.
(Mao, Tsé-toung)（美術学校）

指で月を示すと馬鹿者は指を見る（中国のことわざ）

Quand le doigt montre la lune, l'IMBECILE regarde le doigt.（音楽学校）

運動の敵は懐疑主義，ここに実現されていることはすべて自発性から生じたダイナミズムに由来する。

L'ennemi du mouvement, c'est *scepticisme.*

Tout ce qui a été réalisé vient du dynamisme qui découle de la spontanéité.　(東洋語学校)

新異国趣味的オリエンタリズムをたおせ。

A bas l'orientalisme néo-exotique ！(東洋語学校)

革命には二種の人間がいる。革命を行う者と革命を利用する者だ。(ナポレオン)

Dans la Révolution, il y a deux sortes de gens ： ce qui la font, ceux qui en profitent.　(Napoléon)(コンセルバトワール)

もしすべての老人が手をつないだら滑稽だろう。
若者は愛の行為をし，老人はワイセツな行為をする。

Si tous les vieux se donnaient la main ce serait ridicule.

Les jeunes font l'amour, les vieux font des gestes obscènes.

(リセ・コンドルセ)

創造的大衆　バンザイ。
ブルジョア的無教養は否
文化はブィヨンだ。

Vivent les masses créatrices.

Non à l'inculture bourgeoise,

La culture est un bouillon.

社会主義レアリズムをたおせ，
シュールレアリズム・バンザイ。

A bas le réalisme.

Vive le surréalisme.　(リセ・コンドルセ)

想像力は天賦の才ではない，それは優れて習得の対象である。(アンドレ・ブルトン)

L'imagination n'est pas don mais par excellence objet de conquête. (A. Breton) (リセ・コンドルセ)

他人の自由は私の自由を無限にひろげる。(バクーニン)

La liberté d'autrui étend la mienne à l'infini. (Bakounine)

(リセ・コンドルセ)

学べ，学べ，行動し理解するために学べ（レーニン）

Apprendre, apprendre, apprendre pour agir et comprendre (Lénine)

(リセ・コンドルセ)

「ニマニテ」は最後の資本家が最後の左翼(ゴーシスト)主義者の腹わたで首をくくられるときにはじめて幸福になるだろう。

L'Humanité ne sera heureuse que quand le dernier capitaliste sera pendu avec les tripes du dernier gauchiste. (リセ・コンドルセ)

権力が工場をもっていた
労働者がそれを奪った！
偽権力が大学をもっていた
学生がそれを奪った！
偽権力はもはや権力しかもっていない……
われわれがそれを奪おう !!

Le pouvior avait des usines,
Les ouvriers les ont prises !
Le *hipo pseudo* pouvoir avait des universités,
Les étudiants les ont prises !
Le *hipo pseudo* pouvoir n'a plus que le pouvoir……
Nous lui prendrons !! (リセ・コンドルセ)

われわれに協力せよ
われわれはもはやあなた方の子供たちが牢獄にいるのを見たくない。

Aidez-nous

Nous ne voulons plus voir vos enfants en prison.

（リセ・サン=ルイの通りに面した壁に）

国境＝弾圧

Frontières = répression.（美術学校）

国境なんかどうでもよい。

Les frontières on s'en fout.（シアンス・ポ）

＊　＊　＊

ここに採集した落書きはパリのごく限られた地域に記された文字の，しかもそのごく一部にすぎない。またここに記された文字から，学生全体の傾向をおしはかるのは厳密には正しくないだろう。ここに集めた言葉だけから判断すれば，おそらくアナーキスト系の学生やシュールレアリストの主張が拡大されて映るかもしれない。だがパリに限らずフランス全国の学生たちが一斉に刷毛やペイントをもって彼らの言葉を公共の建物や街の壁に記しはじめたという事実は，その言葉の激しい内容や多様性とともに，圧倒的な力でわれわれに迫ってくる。言葉の内容は（時に）幼稚で表現は拙いにしても，またそこには救いがたいほどに文化主義的な傾向があらわにされているにしても，個々の学生がそれぞれの主張をもち，それぞれの要求をもち，言葉があふれるように内面から湧きだしてきたことは疑えない。

「5月革命」はなによりも学生によっておし進められた運動であった。既成の左翼政党や労働組合の指導部の硬化症的な反発にもかかわらず，学生の運動があれほど多くの労働者をうごかし，あれほど多くの労働者との連帯に成功しえたのは何故であろうか？　その理由の一つはおそらく，これまでの労働運動が意識的無意識的に見落としてきたもの，つまり様々な機会を通じて抑圧されながらも常に潜在し続けた欲求を，5月の学生たちの運動が汲みあげることに成功したということであろう。大学の占拠が工場に波及した（上からの指令なしに）という事実は，学生の運動が労働者の潜在的な不満や欲求に一つの表現形式を与えたことを意味する。すなわちここで問題になるのは運動の自発性の問題であり，労働や革命が一つの祭りでなければならぬという考え方である。

硬化した思想や組織の割れ目から，あふれるようにして表面に現われてきたこの要

求を，単なる賃上げや労働時間の問題にすりかえてしまったＣＧＴやフランス共産党が選挙で敗北したのはむしろ当然だろう。

抑圧され潜在化した不満と欲求は，革命的な状況のなかで出口を与えられ，革命的な行為のなかで意識化され，明確とはいえないまでも一定の形をとりはじめた。わたしはそこに「５月革命」の真の意味を認めたいと思う。５月の事件をスチューデント・パワーとかフランスのプロレタリアの自覚と強さが体制をゆるがしたという点で過大評価してはならないと思う。学生の力は物理的軍事的にみれば，たとえ幾百のバリケードを築こうとも，もしＣＲＳの本格的な攻撃が行われば，30分とは抵抗しえない，虚弱なものにすぎないだろう。またフランスの労働者は一般に決して革命的とはいえず，むしろ工場占拠とストライキを通じてようやく自己の真の欲求とその欲求の革命的な性格に気づきはじめたにすぎない。５月の事件は政府の失策と学生の巧みな戦術によって「５月革命」にまで展開したが，もともと革命ではなく革命の萌芽にすぎない。この点で現在，学生たちが「これは始まりにすぎない，闘争を続けよう」という言葉をスローガンにしているのは正しいのだ。

またこの点で，プログラムを欠いた学生運動がこのような敗北をもたらしたという主張は，それが事実に反しているだけでなく，無意味なのだ。学生たちは運動のあのような高揚は予想していなかったが，このような「敗北」は最初から予想していたことは，ソヴァジヨやコーン＝ベンディットの発言でも明らかだろう。彼らは幻想をもっていなかった。「５月革命」ははじまりにすぎない。しかし少なくとも新しい革命の可能性を提示しえたことは確かであろう。

このように無数の多種多様な言葉が壁の上に記されたということは５月事件の本質にかかわっている。政治情勢や経済の分析は必要であり重要である。しかし今度の事件にかんする限り，それだけではほとんど何も理解できないだろう。学生や工場を占拠した労働者の内的な衝動や欲求を通じて，逆に歴史的な状況を理解してゆかねばならないと思う。いま知識人に課せられた仕事は，学生たちのマルクスやマルクーゼ理解の程度について教師根性の露呈した論説を書くことではなく，まず学生やストライキに参加した労働者を理解すること。つまり壁に記された無数の言葉から出発して新しい時代の思想の形成にむかうことでなければならない。

６月14日オデオン座が警察の手に落ちた。６月16日，ＣＲＳがソルボンヌを占拠した。６月27日，美術学校に警官隊が入る。６月29日，シアンス・ポの学生が占拠の中止を決定。７月１日法学部の学生は自発的に占拠を止める。７月２日，ナンテール閉

鎖。7月3日，政府は閣議でパリのすべての公共建築物の占拠を中止させることを決定。7月5日サンシエ分校と理学部（アル・オ・ヴァン）の学生が警察力によって排除される。7月8日，医学部と装飾美術学校に警官隊が入る。現在，これらの建物の周囲には多数の警官が配置され，学生は大学に入ることができない。パリの観光客は，フランスの警官を見たければ大学に行けばよい。だが学生を見たければどこに行くか？学生を見たければ警察に行けばよい，というところまで事態が進んでいないのは幸いだ。「パリの警官はどうしてインテリなのか？…ソルボンヌに行ってるからさ」。五月の初めこんな一口話がはやっていた。だがこの話はポーランド起源だということである。

7月13日の夜，わたしは革命記念日の前夜祭を見に出かけた。5区と6区，つまりカルチエ・ラタンとその近辺の野外舞踏会は禁止されていた。しかし市庁からバスチーユ広場にかけての通りは明るく人波でうめられていた。夜店が出ていた。風船や派手な色の麦ワラ帽子，南京豆，西瓜の切売も出ていた。ときどき紙吹雪を頭からぶつかけられたりした。あちこちで若者たちが通行人の足元めがけて投げつける癇癪玉の音がお祭気分を高めていた。

12時に近かったと思う。わたしはバスチーユ広場に面したカフェーのテラスに座って人ごみを眺めていた。ダンスは行われていなかったが，大変な人出だった。簡単な仮装をした学生たちが広場の一隅で喚声をあげ，土人踊りのようなことをはじめた。服装から判断すると美術学校の学生のように思えた。彼らは数本の赤旗と黒旗をもっていた。もっともそれは旗というよりも布切れといった感じだ。50人か60人もいただろうか。やがて学生たちは広場の中央をぐるぐるまわりはじめた。2，3の学生がビラを配りはじめた。インターナショナルと革命歌の歌詞が印刷してあった。彼らは特に政治的なスローガンは叫ばなかったと思う。ただ「これは始まりにすぎない，闘争を続けよう」とだけ叫んでいた。警官が出て，人ごみの中で「鬼ごっこ」がはじまった。交通整理の台がひっくりかえされた。催涙弾がはじけた。広場の群衆が走りはじめた。露店で南京豆を売っていたおじさんが，あわてて店じまいをすると，豆を煎っていた大きな鍋をもって走りだした。その隣に店を出していた商人も風船の大きな束をもって駈け出した。数台の警察車がカフェーの横手に止まると，ヘルメットをかぶった警官の一隊が，警棒をふりあげてレピュブリック広場の方向に走っていった。広場にはすでに人影はまばらだった。

カフェーの中は逃げ込んだ人々で満員だった。ボーイたちはテラスの椅子をたたみ，ガラス戸を閉めはじめた。やがてさきほどの警官隊が5，6人の若者をひったて

背中を警棒で小突きながら引き返してきた。彼らはひどく興奮していた。息を切らして苦し気だった。カフェーの奥から誰かが「サロー」と罵りの言葉を叫んだ。警官がいっせいにこちらを向いた。わたしはあの警官たちのひきつって歪んだ表情を忘れることができないだろう。一人の警官が通りがかりにテラスに立っていた若い男に思いきり警棒の一撃をくらわせた。びしっと音がした。警官は何か叫んでもう一度，警棒をふりあげて威嚇した。若い男は無言で警官をにらんでいた。その首すじに警棒のあとがはっきり残っていた。この日カルチエ・ラタンでも同じような事件があり200人の逮捕者が出た。7月14日の夜にもカルチエ・ラタンで同じような衝突が起こった。

新内閣の誕生に際してドゴールは秩序の回復の問題を第一にとりあげた。そしていまパリは観光客があふれ秩序は回復されたかに見える。カルチエ・ラタンの要所には警官を満載した数台の黒い警察車が常時配置され，落書きや張り紙で埋められた壁はきれいに塗りかえられ，その上に「1881年7月29日の法律により張り紙を禁ず」という文字が，あらためて鮮やかに記されている。だがはたして秩序は回復されるだろうか。青年の首すじに残った警棒のあとは数日で消えるかもしれない。しかしこの青年が権力に対して抱く憎悪は容易に消え去りはしないだろう。権力はふたたび学生たちを大学から追い出し，街頭からも締め出した。だが警察力が永遠に大学を占拠し，街頭を占拠することは不可能である。大学が存在する限り，大学はいつかは学生をむかえ入れなければならない。講義がはじまれば教室は常に集会場だ。学生は好きなときに大学を占拠できる。学生はさまざまな機会を通じて抗議デモを行い「秩序」を破壊するだろう。学生たちが壁に記した文字を消すためには壁を洗い塗りかえればよい。しかしひとたび発っせられた言葉は，それが内奥から自発的にあふれ出した言葉である限り，いかなる権力いかなる手段もそれを抹殺することはできない（1968年7月18日，パリ）